

カリタス女子中学校 第二回入学試験

二〇一八年二月一日（午後） 実施

# 国語問題

（五〇分）

\*答えはすべて解答用紙に記入すること。

\*字数の指定がある場合は、句読点をふくむこととします。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

日本の草地は、人手が加わらなくなるとやがて藪やぶになり、森林に移り変わる。森林がもともと少ない国や、熱帯のように伐採ばっさいで減ってしまった国では、好ましいことかもしれないが、日本では事情が違ちがう。私の研究室には、中国の内陸部の新疆ウイグル自治区から来ている留学生がいる。中国の北西部にあり、モンゴルやロシアの近くである。彼は日本に来て間もないころ、草原性のチョウが激減して次々に絶滅めつきぐしほ惧種ぐいしゆになっていることを聞いて、最初は、たいそう驚おどろいていたし、なぜそうなるのか理解できないと言っていた。それは無理もない。

【1】ウイグルの州都、ウルムチの年間降水量は、わずか二五〇ミリほどで、東京の七分の一ほどしかなく、草原が広がっているからだ。草原性のチョウは普通ふつうにいるようで、日本では絶滅の淵ふちにあるヒヨウモンモドキやミヤマシジミはあちこちに飛んでいるという。

約二万年前の氷河期には日本もいまより降水量や気温が低く、草原や疎林そりんなどの開放的な環境かんきやうが広がっていたらしい。そのころに大陸からさまざまな草原性の生物が渡わたってきて、日本各地に棲すんでいたようだが、その後の温暖化で草地が減るにつれ、彼らの棲み家は人間が維持管理する草地に限定されるようになった。こうした環境は数千年にわたって維持されてきたのだが、戦後のエネルギー革命や高度経済成長による土地開発で、あつという間に減ってしまった。それに私たちが気づいたのは、比較ひかくてき的最近である。【2】三〇年以内であろう。阿蘇山あそさんや霧ヶ峰きりがみねなど広大な草原が広がっている地域では、地元の人たちにより毎年春先に①ダイキボな野焼きが行われている。昔は燃料や家畜の飼料採集のために人間が手を入れてきたが、いまでは野焼きによる草原の維持そのものを目的とした行事になっている。野焼きは、いつけん自然破壊はかいのように思えるが、その逆である。もちろん野焼きで焼け死ぬ生物もいるが、【3】草花や昆虫こんちゆうのように、野焼きがあることで維持されているものも数多い。野焼きのような環境攪乱かくらんに適応した生物こそが、「草原性の生物」だからである。

オオルリシジミという絶滅危惧種のチョウがいる。このチョウは、もともと青森県から中部地方の山間部の草原と、阿蘇山麓あそさんろくに広く分布していたが、いまでは長野県の三か所（うち二か所は再導入されたもの）と阿蘇山麓にしか見られない。このチョウは幼虫時代にクララという有毒のマメ科植物を餌えさとし、他の植物は【4】食べない。

牛や馬があちこちにいた時代、有毒なクララにとって放牧地は天国だったに違いない。食べられずに残されたばかりか、競争相手である他の植物が牛や馬に間引かれるので、大いに繁栄はんえいできた。おまけに、「毒は薬にもなる」の教えどおり、鎮痛剤ちんつうざいや虫よけにもなったので、

人間からも<sup>②</sup>重宝<sup>じゆうぼう</sup>されたらしい。だから、降水量が増えて森林が広がった日本でも、オオルリシジミの棲み場所はあちこちにあったのだろう。ところが、戦後、激減の一途<sup>いっしょ</sup>をたどった。霧ヶ峰や追分が原などの広大な草原では、ゴルフ場や別荘<sup>べつそう</sup>地に置き換<sup>か</sup>わったことが主要因であるが、人里に近い場所では、農薬散布や<sup>※</sup>圃場<sup>ほじょう</sup>整備、草地の管理放棄<sup>ほうき</sup>、そしてマニアによる乱獲<sup>らんかく</sup>で各地で絶滅したようだ。

長野県では、広大な草原だけでなく、人家に近いいつけんごく普通の田んぼの畦<sup>あぜ</sup>にもオオルリシジミは棲んでいた。私の父が戦後間もないころに採集した長野県飯島町の個体（本州最南端の記録）も、山ぞいの田んぼの縁<sup>かち</sup>にいたらしい。長野県にまでも残っている二か所の生息地も、こうした場所である。採集禁止になってるのはもちろん、地元の人たちによる草刈<sup>くさか</sup>りや野焼きによって草地が維持され、絶滅寸前の状態から個体数が徐々に回復している。

面白<sup>おもしろ</sup>いことに、野焼きはオオルリシジミの天敵であるメアカタマゴバチという寄生蜂<sup>せいせいばち</sup>を減らす役割がある。オオルリシジミは、地面の隙間<sup>すきま</sup>にもぐって蛹<sup>さなぎ</sup>で越冬<sup>えつとう</sup>するので火の影響<sup>えいきやう</sup>を受けないが、寄生蜂はいろいろなガの卵に寄生し、地上で越冬するので焼け死ぬのだろう。メアカタマゴバチはどこにもいる昆虫で、草原に適応した種ではない。だから、オオルリシジミが棲んでいる草地でこの寄生蜂が減っても、保全上は何ら問題ない。また幼虫が食べるクララも野焼きに強く、競争相手の植物が減る分、かえって増えるようだ。だから、野焼きによって手ごわい天敵からも解放されるうえ、餌の面でも恩恵<sup>おんけい</sup>を受けている。草刈も野焼きも、昔から日本人が営んできたものである。

**B** その営みの復活こそが、いまでは第一級の希少種（不名誉<sup>ふめいよ</sup>な称号<sup>しょうごう</sup>である）となってしまった生物を育<sup>はぐ</sup>んでいるのである。

特定の場所だけであれば、植物やチョウのために地元の人が定期的に手を入れ、草地を維持することはそれほど困難ではない。だが、草地に依存<sup>いぞん</sup>する生物種は数多く、日本のあちこちで減っている。だから、人間の善意の活動だけで各地の草地を維持するには限界がある。広域で実現するには、経済ベースに乗った何らかの仕掛<sup>しか</sup>けが必要だろう。

最近、草地を資源として見直そうという<sup>③</sup>キウン<sup>きうん</sup>が生まれている。草は成長スピードが速く、刈ってもすぐに回復する「減らない資源」だからである。西日本のススキ原では、一ヘクタール（百メートル四方の面積）で年間に一〇トンもの乾物<sup>かんぶつ</sup>が生産されるといふ。シカが増えて森の中の食べ物がなくなっても、森の外にはほぼ無<sup>※</sup>尺<sup>せき</sup>蔵<sup>ざう</sup>に餌となる草があり、いっこうに数が減らないのも頷<sup>うなず</sup>ける。

資源としての使い道は、バイオ燃料や家畜の飼料などである。バイオ燃料は、石油などの化石燃料と違い、二酸化炭素をリアルタイムで吸収して造られた光合成産物である。だから、バイオ燃料を燃やして発生した二酸化炭素は、新たな負荷<sup>ふか</sup>にはならず、温暖化の防止に一役

買うことができる。カーボン・ニュートラルと呼ばれる所以である。

だが、通常のバイオ燃料はトウモロコシ、サトウキビ、油ヤシが原料なので、森林や農地をつぶして作られることが多い。だから、決して生態系に優しいとは言えないし、食料生産とのバツティングも問題になる。ところが、日本の草地の多くは放棄されたままの農地や荒地であり、それを有効活用するのだから、そうした問題もない。また、家畜の飼料としては昔から使われてきた実績がある。さらに最近では、栄養学的な面から、ススキなどは外来牧草よりもバランス面で優れた飼料であることがわかってきた。

バイオ燃料は、再生可能エネルギーであり、温暖化防止にも役立ち、さらに地域社会を支える農業の振興にもつながると言われている。だが、生物多様性の観点からは更なるメリットがある。絶滅危惧種を含む草原性の生物の保全に役立ち、またシカなど野生動物の増加の温床である放棄地を整備することにもつながる。まさに、「二石五鳥」のご利益があると言えよう。あとは、技術革新により、経済的に採算が合うバイオ燃料や飼料の精製法を探ることだ。日本人の知恵と技術力からすれば、決して高いハードルではない。

〈宮下直著『生物多様性のしくみを解く』（工作舎）より〉

### 【語注】

- ※ 疎林……………立ち木のまばらな林。
- ※ 野焼き……………草がよく生えるように、冬のうちに野のかれ草を焼くこと。
- ※ 攪乱……………かき乱すこと。
- ※ 圃場……………はたけ。
- ※ 無尽蔵……………いくら取ってもなくならないこと。
- ※ バツティング……………物事が競合すること。

問一 ① ダイキボ ② 重宝 ③ キウン のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 「1」～「4」にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア いっさい      イ せいぜい      ウ なにしる      エ むしろ      オ おまけに

問三 A たいそう驚おどろいていた      とありますが、なぜ驚いたのですか。その理由としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア 彼の故郷では草原が広がっているが、日本は高度経済成長による土地開発で草原があつという間に減ってしまったから。

イ 彼の故郷では普通に草原性のチョウがあちこちに飛んでいるが、日本ではそれらのチョウが絶滅しそうになっているから。

ウ 彼の故郷ウルムチでは年間降水量が、わずか二五〇ミリほどだが、東京ではその七倍もの降水量があるから。

エ 彼の故郷では広い草原での野焼きは行われませんが、先進国である日本では危険な野焼きをずっと続けて行っているから。

オ 彼の故郷では広い草原を維持する努力をしているのに、日本では草原が減っていることさえ気づいていなかったから。

問四 B その営みの復活こそが、いまでは第一級の希少種（ふみいよ不名誉なしやうこう称号である）となってしまった生物をはぐく育てている      とありますが、

これについて次の(1)～(4)の問いに答えなさい。

(1) 「その営み」とは何ですか。答えなさい。

(2) 「第一級の希少種となってしまった生物」とは何ですか。答えなさい。

(3) その生物が絶滅しそうになった原因を筆者はどういうことだと考えていますか。すべてあげ、四十字以内にまとめなさい。

(4) 「その営み」が、第一級の希少種となってしまった生物を育てることができるのはなぜですか。その理由をすべて答えなさい。

問五 C 「一石五鳥」      とは「一石二鳥」ということわざをもじったものです。「一石」にあたるのは「草地を資源として見直すこと」です

が、「五鳥」にあたるのは何ですか。答えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

「あたし」（ナツ）と「サエ」は教室に行けず、保健室登校をしている中学生です。しかし、「サエ」は「あたし」よりも先に教室に戻れるようになりました。次の場面は、その後も保健室で過ごす「あたし」の様子を描いた部分です。

どうしてこんなみじめな思いをしなきゃいけないの。見ないで。聞かないで。気づかないで。だって、あたし、べつに好きでここに閉じこもってるわけじゃない。違<sup>1</sup>うの。ほんとうに、違<sup>1</sup>うんだよ。でも、それならどうして、テレビや漫画<sup>まんが</sup>があつて、好きなだけ遊んでいられる自分の部屋から、学校の保健室までわざわざ通うんだらう。ずっと前に、長谷部先生<sup>※</sup>にそう聞かれたことがある。そのときは、だって、サエと遊べるんだもんって答えて、二人してトランプのスピードで勝負をしていた。その答えに嘘<sup>うそ</sup>はないんだ。でも、その前はどうかだったらう。サエが保健室に通うようになるまでの、ここで一人きりで過ごしていたときは？ 先生を①マジ<sup>※</sup>えて、お昼休みにUNO<sup>※</sup>で遊んだときのことを思い出した。ここでやる遊びって、部屋にあるパソコンやWi<sup>※</sup>iと比べると、すっごくローテク。ださくて、くだらなくて、小学生みたいで。A それなのに――。

気がついたら、ゆで卵の殻<sup>から</sup>を剥<sup>む</sup>いていた。いつの間にかお昼で、そして、いつの間にか一人だった。長谷部先生の気配がない。今日も、職員室まで給食を取りに行く気になれなくて、あたしは脆<sup>もろ</sup>くひび割れた卵の殻に指を食い込<sup>こ</sup>ませていた。今朝はパン一枚だったから、すっごくお腹<sup>なか</sup>がすいたけれど、でも、いいんだ。時計を見ると、お昼休みの真<sup>ま</sup>っ最中。こんな時間に、廊下<sup>ろうか</sup>は歩けない。眩<sup>まぶ</sup>しい陽射<sup>ひざ</sup>しに怯<sup>おび</sup>える。吸血鬼<sup>きゅうけつ</sup>みたいなのに、あたしにはお昼休みの喧<sup>けん</sup>噪<sup>さう</sup>が合わないんだ。無邪<sup>むじゃ</sup>気<sup>き</sup>にあがる楽しそうな声や、廊下を駆け抜<sup>ぬ</sup>ける上履<sup>うわば</sup>きの音は、あたしの身体<sup>からだ</sup>を容赦<sup>ようじや</sup>なく焼<sup>や</sup>いてしまうから。

サエは、どうなんだろう。もう、教室に戻って、はじめちゃったわけ？ 泣き言を言い、保健室に来たりしないの？ 今日<sup>きょう</sup>はどうしてるとか、メールくれないわけ？

「昨日<sup>きのう</sup>の課題、ちゃんと終わらせた？」

長谷部先生が戻ってきて、パ<sup>※</sup>ーティションの中に入ってきた。

閉じたノートに視線を移す。昨日の課題だから、本当は昨日までに終わらせないといけないものだった。けれど、一人でする勉強はひどくみじめで。卵の殻は、今日もうまく剥けなくて、表面に爪痕が残ってしまう。

長谷部先生は向かいの椅子を引いて、そこに腰掛けた。それから、「サエちゃんがいないと、寂しいねえ」と言う。空腹に、お腹が鳴った。

あたしは卵に張り付く殻を取り除きながら、かぶりを振る。寂しいねえ。長谷部先生の声は、耳に入り込んで、あたしを身体の中から揺さぶった。寂しいねえ。サエちゃんがいないと。いつの間にか指に力がこもって、柔らかな卵殻を強く叩きつけていた。鱗が入り、その全身に波紋のような痕を残していく。寂しくない。あたしは誰にも聞こえないようにつぶやく。 2 寂しくない。寂しくなんかない。

先生は聞く。

「サエちゃんが教室に戻れるようになって、嬉しくないの？」

手元で半ばひしゃげてしまった②。ブサイクな卵を見下ろす。は？ っと思った。意味、わかんない。教室に戻るって、嬉しいことなの？ だって、あそこ、あたしを笑う人たちしかいない。あたしのことばかりにして、掃除を押しつけて、陰口を叩いて、くすくす笑って。

わかっているよ。あれって、べつに、いじめっていうほどひどい仕打ちじゃないし、みんなだって意識してやってることじゃない。ただ、教室の隅っこにいる大人しいあたしのことなんて、なんとも思っていないだけで。

なにかひどいことをされたわけじゃない。明確な理由があって③。キズついたわけじゃない。ただ、ばかにされてるような気がするだけ。だから、どうして教室に行かないのって聞かれると、答えられなくなる。教えて欲しくなる。わからない。わからないんだ。自分にもどうしてなのか。どうして、脚が震えるのか、身体がすぐんでしまうのか、ほんとうに、わからない。サエはどうだったんだろう。サエにとつて、教室ってどんな場所だったんだろう。

「サエは……」これはあたしの姿みたい。みすばらしく、ぐちゃぐちゃになった卵を見下ろしながら、あたしは聞いた。「教室に、戻りたかったの？」

「そうね」先生は答えた。難しい問題に考え込むように時間を掛けて。「戻りたかったから、ここを出て行ったんじゃないのかな」教室に戻ることができて、サエは嬉しい？

「もし、そうだったら」

言葉が震えた。先生は聞いた。嬉しくないのって。そんなの決まってる。だって、サエが望んだことなんでしょ。先生、あたしね、サエに訪れるラッキーは、全部、自分のことみたいに嬉しい。嬉しいんだよ。あの子が幸せそうに鼻歌を歌っていると、あたしまで、今日はいいいことあるんじゃないかなって、そう思えるんだ。それなのに。

それなのに、どうしてあんなふうに言ってしまったんだろう。頑張ってねって。負けないでねって。たまには、ここに顔を出してねって。どうして言えなかったんだろう。なんて、なんて、自分勝手なんだろう。「嬉しい、よ。それなのに、<sup>3</sup>ぜんぜん嬉しくない。嬉しくないんだ」

あたしの喉は、風邪のときみたいに熱く震えて、だから、言葉がうまく出てこなかった。

頬を手の甲の感触が通り過ぎていく。ニットベストの肩で、溢れるそれを拭った。

「なっちゃんは、教室には戻りたくない？」

「戻りたくない。あんなとこ、戻りたくない」繰り返し、かぶりを振った。「どうして、サエは平気なの。どうして、今になって教室に戻っちゃったの」

そうね、と長谷部先生は頷いた。

「きつと、あなたたちが過すには、ここはもう狭すぎるんだ」

先生の手が伸びる。スチール机に置いたままの、もう一つの卵を取り上げた。

「どんな生き物だって、生きていれば大きくなるんだよ。どんどん大きくなって、部屋にも、家にも、学校にも閉じこもっていらなくなるんだ」

なにそれ、と思った。家や学校より大きくなるなんて、ゴジラじゃん。あたしは、半分だけ。そう、半分だけ笑う。

「あたしは、教室なんて戻らないよ。高校にだって行かない。就職だつてしないもん。ずっと部屋に閉じこもってる。それでいいんだ。それでいいんだもん」

そう、だから進路希望なんて考えない。このまま保健室にこもって、家に閉じこもって、肩を小さくして、息をひそめながら生きていく。死んじゃったってかまわない。かまわないから。だから、学校になんて、教室になんて、行きたくない。それでいいんだ。

だだをこねるような言葉を、先生は最後まで黙って聞いてくれた。

「でもね」と、先生は言う。「やっぱり、なっちゃんは大きくなっちゃうんだよ。部屋に閉じこもっているつもりでも、身体がどんどん大きくなって、そこに④収まらなくなっちゃうんだよ」

4 意味わかんない。意味わかんないよ。

「あたし、怪獣じゃない」

先生の言葉、すべて否定したくて、かぶりを振った。

「うん。でもね、人間って、大きくなるの。C身体じゃなくて、生きていく場所とか、人との関わりだとか、そういうのがすっごく大きくなって収まらなくなっちゃうんだ。D身体は勝手に大きくなるの。ぐーんと大きくなったら、なっちゃんは大きくなったぶん、外で生きていけないといけないんだよ」

先生の言葉を聞きながら、あたしは想像していた。小さな居心地のよい空間を、自然と突き破ってしまうほどに、でかくなっていく自分の身体を。部屋を突き破って、家を破壊して、街よりも大きくなっていく、怪獣みたいな自分の姿を。

「あたし、大きくなんないよ。絶対、途中で死んじゃうよ」

「それでも、今は生きているじゃないの。なっちゃんは気づいていないかもしれないけれど、今もじゅうぶん、大きくなっているんだよ」

視界に、先生の手が入り込む。アルミに包まれた銀色の卵が差し出されていた。Eぐちゃぐちゃになってしまった卵を置いて、代わりにそれを受け取る。顔を上げると、先生はもう立ち上がっていた。

「なっちゃんにとって、教室がまだ怖いところなら、無理をして戻らなくてもいいんだ。でも、サエちゃんにはきちんと謝りにいかなきゃ。なっちゃんは、だから泣いているんでしよう?」

泣いてる? あたし、泣いてる。

F銀の卵を両手で包んで、唇を噛みしめる。どうだろう。謝りたいから、泣いているのだろうか。わからない。もしかしたら、一人になりたくなくて、だから泣いているのかもしれない。そんな自分勝手な理由で涙を零しているだけなのかもしれない。自分のことなのに、わからないことがたくさんある。ほんとうに、5わからない。わからないよ。けれど、自分のことを教えてくれる人は、きつとどこにもいないんだ。

しばらく先生を見上げて、胸の中を漂う、一つだけ確かな気持ちを見つけた。

サエに会いたい。

ごめんねって、言いたいよ。

頷くと、先生は微笑んで、背中を見せた。

それから、クリーム色の仕切り壁を動かして、あたしが進むべき場所を教えてください。

急に、狭かった世界が開けた気がした。

〈相沢沙呼著「ねえ、卵の殻が付いている」『雨の降る日は学校に行かない』（集英社文庫）より〉

〔語注〕

※ 長谷部先生……………保健室の先生。

※ UNO……………一九七〇年代にアメリカで発売された二十人で遊ぶカードゲーム。

※ Wii……………二〇〇六年に発売されたテレビに接続して遊ぶ家庭用ゲーム。

※ ロータク……………「ローテクノロジー」の略。単純で初歩的な技術。

※ パーティション……………後に出てくる「クリーム色の仕切り壁」のこと。

※ かぶりを振る……………頭を左右に振って、否定をすること。

問一 ① マジえて ② フサイク ③ キズ ④ 収まらなく のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 1 違うの。ほんとうに、違うんだよ 2 寂しくない。寂しくなんかない 3 ぜんぜん嬉しくない。嬉しくないんだ 4 意味わかんない。意味わかんないよ 5 わからない。わからないよ の中には、本心と合わない言葉があります。1～5の中から一つ選び、番号で答えなさい。

問三 A それなのに——とありますが、「——」には「どうして楽しいのだろう」といった「あたし」の気持ちが続くと考えられます。「パソコンやWii」よりも「トランプ」や「UNO」を「あたし」が楽しいと感じるのはなぜですか。説明しなさい。

問四 B それは何を指しますか。本文中の一字の言葉で答えなさい。

問五 C 身体 と、D 身体 は同じ言葉ですが、意味は違います。それぞれのどのような意味ですか。違いがわかるように書きなさい。

問六 「長谷部先生」はどのような考えで生徒と接していますか。答えとしてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 生徒の気持ちに全てを任せ、いつでもそつとしておこう。
- イ 生徒の話をよく聞き、理解した上でアドバイスをしよう。
- ウ からかいを許さず、生徒同士の謝罪をしつかりさせよう。
- エ 生徒には難しい話ばかりを聞かせ、その場をごまかそう。
- オ 自分の責任になるので、何が何でも生徒を教室に戻そう。

問七 「ナツ」は、同級生の中になじめない自分自身のことをどのように表現していますか。本文中から十三字でぬき出しなさい。

問八

この作品に描かれる <sup>E</sup>ぐちやぐちやになった卵 と、後に出てくる <sup>F</sup>銀の卵 はそれぞれ何を暗示していますか。答えとして  
もつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「あたし」のきずつきやすい複雑な心と、「あたし」が新たな気持ちで再出発することへの希望。
- イ 「あたし」と「長谷部先生」の仲の悪さと、新しい卵を見せて「あたし」のきげんを取る先生の心情。
- ウ 「あたし」の内気な性格と、「あたし」をよそに新たな生活を築しもうとする「サエ」の様子。
- エ 「あたし」と「サエ」の友情の崩壊と、「あたし」が新たな友人を作っていこうと努力する姿。
- オ 「あたし」とクラスメイトの関係の悪さと、「あたし」の他の者には流されまいとする強い決意。